

内容

第一部 出会いと逃亡

第二部 初めての夜

第三部 心の距離と過去の影

第四部 発情期の夜

第五部 試練と決断

第六部 番の契り

第七部 エピローグ

第一部 出会いと逃亡

生贄に選ばれたと聞かされたとき、私は薬草を煎じる手を止めなかった。
「リゼット、聞いているのか」

村長の囁れた声が土間に落ちる。聞いている。聞いた上で、鍋の火加減の方が大事だと判断したただけだ。煮詰めすぎた解熱剤は苦いばかりで効かなくなる。この村で私の言葉に耳を貸す人間はいないけれど、私の薬を飲まない人間もない。

「三年続いた凶作は竜王様のお怒りだと、神殿の託宣が下った。怒りを鎮めるには、贄を捧げるほかないと」

「それで、身寄りのない厄介者がちょうどよかった、と」

振り向かずに言う、背後で息を呑む気配がした。凶星を指された人間の沈黙ほど雄弁なものはない。娘を差し出せと言われて泣く親も、抗議する縁者も、私にはいない。村会議は、さぞ円満にまとまったことだろう。

両親が流行り病で死んだのは、私が十歳の年だった。薬師だった母は、村中の病人を見て回った末に自分が倒れ、母を看病した父が後を追った。娘の私だけが治って生き残り、村人は言った。薬師の家の娘が助かって、薬師が死ぬとはね、と。悪気はなかったのだと思う。ただ、あの日から私は「疫病神の生き残り」で、母の遺した薬草図鑑を頼りに薬を作るようになってからは「便利な厄介者」になった。誰の家にも招かれず、誰の祝いにも呼ばれず、それでも熱が出れば夜中に戸を叩かれる。そういう二十年の締めくくりが竜の餌とは、我ながら安い人生だった。

「……すまない」

謝るくらいなら選ばなければいいのに。そう言いかけて、やめた。言つたところで覆らない決定に唾を吐くほど、私は暇ではない。代わりに私は火を落とし、煎じ終えた薬を棚に並べた。

「これは熱冷まし。こっちは腹下しの薬。乾かしてある薬草は左から効きの強い順。使い方は樽の裏に書いておくから、字の読める人に訊いて」

「リゼット、お前……」

「冬までの分は作っておく。それ以上は、自分たちで何とかして」

最後まで薬師の真似事とはご苦勞なことだと、自分でも思う。でも、これしか知らないのだ。誰かに必要とされる方法を、私はこれしか。

その夜、私は生まれて初めて、薬草の匂いの染みた小屋で一睡もできなかった。死ぬのが怖かったからではない。母の遺した薬草図鑑を、誰に託

せばいいのか決められなかったからだ。表紙の擦り切れたそれを一晩撫でて、結局、夜明けに竈の脇へ置いた。焚き付けにされるかもしれない。それでも、持っていく訳にはいかなかった。竜の腹の中まで道連れにするには、あれは母の人生そのものすぎた。

支度は呆気ないほど早かった。翌朝には白い衣装を着せられ、翌々日には山へ向かう荷馬車に乗せられていた。花嫁衣装を模した生贄の装束は肌に薄く、山の冷気が容赦なく染みてくる。髪を梳いて簡単に結い上げてくれた神殿の老女だけが、指先で私の頬に触れて「ごめんなさいね」と囁いた。この村で受けた、多分いちばん優しい触れ方だった。

荷台の私を、村人たちは遠巻きに見送った。目が合うと逸らすくせに、逸らした先でひそひそと囁き合う。憐れみと安堵の入り混じったあの目を、私は多分死ぬまで忘れない。もっとも、その「死ぬまで」が今夜までなの

だけれど。

「姉ちゃん」

村外れで、小さな声がした。去年、崖から落ちて足を折った子だ。私が添え木を当てて、毎日湿布を替えた。子どもは泣きそうな顔で、握り締めた野の花を差し出してくる。受け取ろうと手を伸ばした瞬間、母親が飛んできて子どもを抱え込んだ。穢れでも移るかのように私を睨んで、それでも最後に一度だけ、深く頭を下げた。

ああ、いいよ。それで。

恨むには、この村は私の全部すぎた。荷馬車が軋み、村が遠ざかる。私は花を受け取れなかった右手を、白い衣装の膝の上でそっと握った。掌に残る三日月形の古い痣が、今日はやけに熱を持っている気がした。物心ついた時からある、火傷とも傷ともつかない小さな痣。母は「お守りだよ」

と笑っていたけれど、何のお守りかは教えてくれないまま逝ってしまった。荷馬車は森を抜け、溪流を渡り、霊峰の裾へ。人が立ち入らぬ竜の領域へと、車輪の音だけが単調に続いた。

霊峰の中腹にある祭壇は、思っていたより古かった。苔むした石畳、崩れかけた柱、風雨に削られた竜の彫像。何百年前のものか、彫像の足元には干からびた花輪の残骸がいくつも積もっている。私の前にも、ここへ置き去りにされた誰かがいたのだろうか。神官が形ばかりの祈りを唱え、私の手首を祭壇の輪に絹紐で緩く結ぶ。逃げようと思えば解ける結び方なのだが、かえって残酷だった。逃げてもいいが、逃げた先に居場所はないと知っていたの結び方だ。

「では……達者で」

達者も何もないだろうと思ったが、神官も付き添いの男衆も、日が落ちる前に転がるように山を下りていった。残されたのは私と、山の静寂と、噛みつくような寒さだけ。

日が沈む。藍色の空に星が滲み、やがて満ちた月が霊峰の稜線を銀に縁取った。寒い。指先の感覚が薄れ、吐く息だけが白く濃くなっていく。恐怖はもちろんあった。竜に食われるのは痛いだろうか。それとも凍えて眠るのが先だろうか。そんなことを考えながら、けれどそれ以上に、こんな最期でも涙一つ出ない自分が、少しだけ悲しかった。泣くほど惜しい明日を、私は持っていなかったのだ。会いたい人は十年前に土の下で、帰りたい家はもう他人の物置で、私がいなくなつて悲しむ人は、たぶん薬の作り方を訊きそびれたことを悔やむくらい。

凍える指先で、掌の痣をなぞる。こんな時なのに、思い出すのは母の声

だった。眠れない夜、この痣を撫でながら母は歌うように言ったのだ。それはお守りだよ、リゼット。いつかお前を、世界でいちばん大切にしてくれる何かと結ぶ、約束の印。……お守りの効き目は、結局最後まで分らなかったね、お母さん。私はこれから、竜に食べられてしまうよ。

「……食べるなら、ひと思いにお願いします」

誰にともなく呟いた、その時だった。

空が、落ちてきたのかと思った。

轟、と大気が唸り、月が翳る。見上げた視界いっぱい翼があつた。夜より黒い、巨大な翼。羽ばたきの一つで祭壇の枯葉が渦を巻き、私の髪と衣装を煽り上げる。石畳が軋み、傾いた柱が崩れ、山そのものが平伏する。うな地響きとともに、それは祭壇の前に降り立った。

黒曜の鱗に月光が流れる。首をもたげれば古木より高く、畳んだ翼は夜空の一部と見分けがつかない。喉の奥で燦る唸りは地鳴りに似て、一呼吸ごとに大気が震えた。伝承の竜王は、伝承よりずっと大きく、ずっと美しく、そして息が止まるほど恐ろしかった。金色の双眸が、真っ直ぐに私だけを映している。縦に裂けた瞳孔。獲物を見る目だ、と全身の産毛が逆立った。

ひと思いに、なんて言ったのは撤回したい。心臓が痛いほど鳴って、結ばれた手首が震える。それでも私は目を閉じなかった。最後くらい、自分の終わりをちゃんと見ていたかった。竜の顎がゆっくりと近づく。生温かい呼気が頬を撫で、硫黄と雷の匂いがした。

食べられる。そう覚悟して奥歯を噛んだ瞬間——竜の輪郭が、月光に溶けた。

黒い鱗が光の粒になってほどけ、渦を巻き、縮んでいく。風が凪いだあとそこに立っていたのは、竜ではなかった。人だ。夜を紡いだような黒髪、月光を鑄込んだ金の瞳、彫像より整った顔立ちの、背の高い男の人。黒衣の裾が夜風に揺れて、その向こうで星が瞬いている。あまりに現実味がなくて、凍えた頭は「寒さで幻でも見ているのか」と真面目に疑った。

男の人は祭壇に上がると、凍えた私の手首から絹紐を解いた。焚き火みたいに熱い指先だった。触れられた場所から、痺れるような熱が染みてくる。果然とする私の手を取り、彼はその場に跪く。まるで、姫君に傳く騎士のように。

「え……あの……」

「——百年待った」

低く、深く、震えるほど甘い声だった。金の瞳が細められ、私の掌の、

三日月の痣の上にそつと唇が落とされる。痣が、火が点ったように熱くなつた。

「百年待った。我が花嫁」

「は……花嫁？ 私は、生贄で……」

「贄などいらぬ。人の子の国が超越す供物にも、詫びにも、興味はない。

この百年、我が欲しかったものはただ一つ——お前だ」

「わ、私、あなたに会ったことなんて」

「今はそれでいい。名は」

「……リゼット」

「リゼット」

たった四文字を、彼は宝石でも転がすように口の中で味わった。それから竜王は立ち上がり、次の瞬間、私の体はふわりと宙に浮いていた。遅し

い腕に横抱きにされたのだと理解するのに、たっぷり三つ数えるだけかかった。

「ちょ、ちょっと待って、下ろして……！」

「断る。百年分だ、待つのはもう飽いた」

彼が笑う。背に再び黒い翼が広がり、夜空に羽音が満ちて、祭壇が、山が、見る間に遠ざかる。悲鳴は風に千切れ、私は反射的に彼の胸元にしがみついた。薄い衣装越しに伝わる体温は、灼けるように熱い。凍えていた体が勝手にその熱を歓迎してしまうのが、ひどく悔しかった。

雲を抜けると、月が近かった。眼下には雲海が銀色に広がり、その果てに黒い霊峰の頂が牙のように並んでいる。攫われているのに、見惚れるほど綺麗だった。

「怖い」

頭上から降ってきた問いに、少し考えて、正直に答えた。

「……分からない。怖いはずなのに、景色に見惚れてる自分がいて、混乱してる」

「よい答えだ」

笑む気配とともに、私を抱く腕にわずかに力がこもった。落とさぬ、と言葉より雄弁に伝えてくる腕だった。

——私の人生、安いどころか、とんでもないことになってきた。

月に向かって攫われながら、竜王の腕の中で、私はただそれだけを考えていた。

目が覚めると、天蓋があった。

生まれてこの方、天蓋付きの寝台なんて絵物語の挿絵でしか見たことが

ない。滑らかな絹の天幕越しに朝の光が透けて、寝具は雲を詰めたのかと疑うほど柔らかい。寝心地の良さに三つ数えるほど蕩けてから、私は跳ね起きた。そうだ。私は昨夜、生贄になって、竜に食べられ——なかった。攫われたのだ。月まで届きそうな高さを飛んで、それから確か、腕の中の熱にうとうとして……。

「うそでしょ、私、寝た？ 攫われながら？」

「寝た——！ ぐっすり寝てた——！ 陛下の腕の中でよだれ垂らして寝てた——！」

寝台の脇から元気いっぱいの声が返ってきて、私は二度目に跳ね上がった。声の主は、十歳くらいの女の子——に見えた。見えたけれど、癖のある銀の髪の間から小さな角が二本覗いて、背中には猫くらいの大きさの翼、腰からは鱗に覆われた尻尾が生えている。

「よだれは垂らしてない……と思いたい」

「垂らしてたよ！ 陛下、袖も拭かせないの。『百年待った花嫁殿の初よだれだぞ』って」

「拭いて！？ 今すぐその袖を洗って！？」

頭を抱える私に、女の子はけらけら笑って寝台に飛び乗った。ミュカ、と名乗った。竜王の眷属の小竜で、今日から私付きの世話係なのだという。

「ここは竜の谷。霊峰のてっぺんの、結界の内側。人間は誰も入れない、竜王陛下のお城だよ」

促されて窓辺に立ち、私は言葉を失った。眼下に、白い雲の海。雲間から突き出す岩峰のあちこちに大小の竜が羽を休め、朝日を浴びて鱗を光らせている。城そのものは黒い岩山を彫り抜いて建てられているらしく、窓枠も柱も、岩から生えたように継ぎ目がない。人の技ではない。何もかも

が、人の物差しの外にある。

「……帰り道、なさそうだね」

「ないない。翼がなきゃ無理だし、そもそも結界を陛下の許しなしに通れないもん」

ミュカはあっさり言って、それから衣装部屋の扉を開け放った。中には色とりどりのドレスがずらりと並んでいる。どれも仕立て下ろしで、どれも私の寸法に見えた。昨夜の今日で、どうやって。考えかけて、やめた。人外の力に人の理屈で悩むだけ無駄だ。

朝食の席は、悩むだけ無駄の連続だった。

長い食卓には湯気の立つ料理が所狭しと並び、その最奥に竜王がいた。夜の闇を纏っていた昨日と違い、朝の光の中の彼は輪郭まで鮮やかで、正

視すると目に毒なほど整っている。私を認めた金の瞳が、ふ、と甘く緩んだ。

「よく眠れたようだな、リゼット」

「お、おかげさまで。……あの、それで、私の席は」

「ここだ」

彼は自分の膝を指した。私は三秒待った。冗談の続きは出てこなかった。

「テーブルに椅子が二十はありますよね!？」

「遠い。百年待った距離を思えば、膝の上でも遠いくらいだ」

「理屈がおかしい!」

抵抗むなしく、私は竜王の膝の上に横向きに収まる羽目になった。背中に回った腕はびくともせず、暴れるだけ体力の無駄だと三口目で悟った。しかも彼は当然のように匙で果実を掬い、私の口元へ運んでくる。

「自分で食べられます……！」

「知っている。俺がやりたいだけだ。ほら、口を開けろ」

空腹には勝てなかった。悔しいことに、どれもこれも今まで食べたどんなものより美味しい。蜜のかかった果実も、白い麺麴も、香草の香る卵料理も。夢中で食べる私を、彼は頬杖をついて、それはそれは幸せそうに眺めていた。視線が痛い。甘い上に痛い。

「あの……確認したいんですけど。私は生贄として捧げられた訳で」

「その話か」

「太らせてから食べる、とかでは」

「ならば遠慮なく太れ。食う趣味はないが、抱き心地は良くなる」

「なっ……」

絶句する私の髪をひと房掬い、彼は当たり前のように口づけを落とした。

心臓が跳ねる。耳まで熱くなるのが自分で分かった。

「昨夜も言ったはずだ。贅などいらぬ。欲しいのはお前だけだ」と

「だから、どうして私なの。あなたと会った覚えなんてない。花嫁って、百年って、何のこと？」

彼の匙が、一瞬だけ止まった。金の瞳の奥を、月の裏側みたいな翳りがよぎる。

「……いずれ話す。今は、ここでの暮らしに慣れろ。お前はもう、寒さにも飢えにも脅かされない。それだけ知っていればいい」

はぐらかされた。分かったのはそれだけで、でも問い詰める隙もなく、食後の彼は私を膝に乗せたまま、手ずから茶まで飲まされた。

午後は、城の案内だった。もちろん徒歩ではない。腰に彼の手が添えら

れたまま、廊下を、階段を、まるで壊れ物を運ぶみたいに導かれる。

「ここが庭園だ」

連れて行かれた中庭で、私はまた言葉をなくした。雲の上だというのに、見たこともない花が咲き乱れている。夜の色をした薔薇に似た花、触れると鈴の音を立てる青い釣鐘草、ほのかに光る白い蔦。谷の地熱と竜の魔力が育てるのだと、彼は事もなげに言った。

「これ……この赤いの、もしかして緋熾草ですか？　書物でしか見たことない。解毒の特効薬になる幻の」

「ほう、分かるか」

「私、薬師の……真似事をしてたから。すごい、群生してる。これ一株で村の一冬分の……」

夢中でしゃがみ込んでから、はっと顔を上げると、彼が妙に嬉しそうな

顔で私を見下ろしていた。

「気に入ったなら、この庭はお前にやろう」

「は！？ 庭を！？ 物の贈り方がおかしいでしょう！？」

「そうか？ では城ごとやろう」

「悪化した！」

夕刻には書庫に案内された。三階分は吹き抜けた壁一面の書架に、薬草学の棚だけで私の村の集会所より広い一角がある。目が眩んだ。正直に白状すると、庭と書庫には心が揺れた。とても揺れた。それを見透かしたように、竜王は笑うのだ。「ここにある全てはお前のものだ」と、まるで難しいことなど何一つないみたいに。

過剰で、強引で、目眩がするほど甘い。誰かにこんなふうに構われたことなど、二十年の人生で一度もなかったから、どんな顔をすればいいのか

最後まで分からなかった。分からないまま、ふとした瞬間に思ってしまった。この人は百年、この広すぎる城で、誰にこの甘さを注ぐこともなく過ごしてきたのだろうか、と。

その夜、湯浴みを終えた私は、部屋へ戻る廊下で足を止めた。月光の差す回廊に、老人が立っていたからだ。長い白髭、深緑の長衣。人の姿だが、気配の底が人ではない。ミュカと同じ、それよりずっと深い何かだ。

「ガレンと申す。陛下の側近を務める老いぼれにございます。花嫁殿」

「……その『花嫁』って呼び方、保留にしてもらえませんか。私、何も聞かされてないんです。どうして私なのか、竜の花嫁が何なのかも」

老竜は少し目を細め、それから静かに言った。

「では一つだけ、お知りにならねばならぬことを。竜が伴侶に望んだ者は

『番』と呼ばれます。互いに望み、うなじに契りの証を刻めば、番の命は竜と結ばれる。……人の身であれば、寿命は竜と同じに。老いは止まり、そして」

月光の下で、老竜の声はどこまでも穏やかで、どこまでも容赦がなかった。

「二度と、人の世へは戻れませぬ。人として生き、人として死ぬ道は、契りとともに閉じます。それが竜の谷の掟」

足元が、すうっと冷たくなった。

「そんな……どうして、そんな大事なことを先に」

「陛下は決して、御身の意に反して契りを結ばれはしませぬ。竜は伴侶の意志を何より重んじる種族。契りには互いの心からの望みが要る——これは破りようのない、種の絶対の律。なれど陛下が百年、御身だけを待たれ

たのもまた真実。あの御方の百年を、老いばれは傍らで見て参りました。

……どうか、それだけはお含みおきを」

「待って。百年って、結局何なんですか。私はまだ二十歳で、百年前になんて生まれてもいない」

「それを語るは、老いばれの役目にあらず」

一礼して去る老竜の背を、私は柱に掴まったまま見送った。

部屋に戻っても、眠れなかった。天蓋を見上げながら、昼間の甘さを一つずつ思い出す。膝の上の体温。髪への口づけ。幸せそうな金の瞳。あの人は優しい。多分、本当に。でも、その優しさの行き着く先は、人であることをやめる契りだ。私の知らない「百年」を理由に、私の寿命が、私の死に方が、私の帰る世界が、いつの間にか決められようとしている。

——私の人生を、勝手に決めないで。

冷たい怒りとも恐れともつかないものが、胸の底で音を立てた。確かに帰っても居場所なんてない。それでも、選ばされるのと選ぶのは違う。決定的に違うのだ。生贄に選ばれた日から、ずっとずっと違うと叫びたかったのだ。

怖いのだと思う。多分、掟そのものよりも。あの目眩がするほどの甘さに、いつか抗えなくなる自分が。庭園ではしゃいで、書庫に見惚れて、膝の上の体温に慣れ始めている、たった一日でこの様の自分が。流されてしまえば楽だろう。愛されて、甘やかされて、人でなくなつて。でもそれは、私が選んだことになるのだろうか。生贄に差し出された時と、いったい何が違うのだろうか。

私は寝台を抜け出し、窓の外の雲海を睨んだ。翼がなければ出られない？ 結界は陛下の許しなしに通れない？

「……やってみなきゃ、分からないでしょ」

夜明け前がいちばん警備が緩むことは、村の鶏泥棒が証明済みだ。私は衣装部屋から一番動きやすい服を引っ張り出し、寝台の絹布を裂いて結び、即席の縄をこしらえた。薬師の真似事十年、山歩きと崖登りなら、そこらの村娘より場数を踏んでいる。

支度を終えて窓辺に立つと、ガラスに映った自分と目が合った。生贄の白装束でも、着せられたドレスでもない、自分で選んだ服を着た自分。それだけのことなのに、昨日までよりずっと、ちゃんと私の顔をしていた。

月が傾く。雲海が白み始める。

——竜王陛下。あなたの百年が何であれ、私の二十年は私のものです。
あなたの花嫁は、逃げますから。

夜明け前の城は、拍子抜けするほど静かだった。

部屋の扉をそっと開けると、廊下の長椅子でミユカが丸くなって眠っていた。世話係として私の部屋の前で寝ずの番——のつもりだったらしい。銀の髪から覗く角、規則正しい寝息に合わせてはたはた揺れる尻尾。起こさないよう、私は音もなくその脇を通り抜けた。少しだけ、胸が痛んだ。ごめんね。あなたのせいじゃないの。

見張りの竜とすれ違わないよう、柱の陰で息を潜める。廊下の角で気配を数え、足音を殺して階段を降りる。村で夜中に薬を届けて回った十年は伊達ではない。急病の報せは真夜中に来ると相場が決まっていて、私は月のない夜道も、崩れかけた吊り橋も、いくつも渡ってきた。厨房の脇から裏庭へ抜け、岩壁の縁に立ったところで、私は裂いた絹布の縄を岩の突起に結びつけた。

眼下は雲。その下がどうなっているかは、見えない。見えないが、昨日窓から観察した限り、城の建つ岩山の中腹には獣道めいた棚が幾筋も走っていた。竜は飛ぶから、歩く道を警戒しない。降りられるところまで降りて、棚伝いに尾根へ回り、結界とやらの端を探す。計画と呼ぶには穴だらけだけれど、寝台の上で百年の重さに潰されるよりましだった。

絹の縄は、思ったより頼りになった。岩肌に足をかけ、少しずつ体を下ろしていく。薬草採りで崖には慣れている。指先が悴む。風が衣の裾を叩く。それでも下へ、下へ。縄の終わりから岩棚に飛び移り、私は初めて振り返って城を見上げた。

黒い岩山から生えた、月色の城。こうして見ると、ぞっとするほど綺麗だった。あの中で、あの人百年、何を待っていたのだろう。

「……考えない。今は考えない」

頭を振って、棚道を歩き出す。夜が薄れ、雲海が朱に染まり始める。棚は思いのほか歩きやすく、私は順調に尾根へ回り込んだ。そして気づいた。尾根の先、朝焼けの空にうっすらと、光の膜のようなものが揺らいでいる。あれが結界。近づくほどに、空気が水飴みたいに重くなる。

膜の手前は、切れ落ちた崖だった。幅は三步分もない岩の橋が、対岸の岩塔へ渡っている。対岸は結界の外——のはずだ。行くしかない。私は岩橋に足をかけた。一步。二歩。眼下の雲の裂け目から、遙か下の谷底が覗く。見なければよかったと思った時にはもう、足がすくんでいた。

風が、来た。

朝の山が吐く、強い吹き下ろし。煽られた体が傾ぎ、慌てて掴んだ岩の角が、ぼろりと崩れた。

浮遊感。

空と雲と岩が回って、私は落ちていた。悲鳴は喉に張りついて出てこない。ああ、これで終わり。竜に食べられるより呆気ない。薄れる意識の隅で、なぜか、匙で果実を運んでくる金色の瞳を思い出した——その時。

世界が、黒に覆われた。

風を裂く音。体を掬い上げる衝撃。気づけば私は、巨大な黒い竜の前脚に、壊れ物みたいに包み込まれていた。翼が朝日を弾き、雲海が遠ざかる。竜はゆっくりと旋回して、さっきの岩橋のたもとに私を降ろした。

光が渦を巻き、人の姿の竜王が目の前に立つ。地面に座り込んだまま、私は自分の手が震えていることに気づいた。今更のように心臓が早鐘を打ち、指先から血の気が引いている。落ちた。本当に、死ぬところだった。

怒鳴られる。責められる。軟禁されるかもしれない。私は震える手を握り込んで、彼を睨み上げた。

彼は――笑っていた。いや、正確には、笑おうとしていた。口元は確かに弧を描いているのに、私を映す金の瞳の奥で、何かが嵐みたいに揺れている。よく見れば、私の肩に置かれた彼の手も、わずかに強張っていた。ああ、この人。怖かったんだ。私が落ちて、心底。それを悟られないように、笑っている。

「惜しかったな。あと十歩で結界だったぞ」

「……は？」

「言っておくが、結界は俺の許しなく通れん。渡り切っても、膜の前で立ち往生だったがな。それでも、城から尾根までは大した脚だ。まさか崖を自力で降りるとは」

肩を震わせて、心底愉快そうに笑っている。予想していたどの反応とも違って、私は毒気を抜かれたまま立ち尽くした。

「……怒らないの」

「なぜ怒る」

「逃げたのよ、私。あなたの花嫁とやらが、あなたの城から」

「逃げてもいい」

彼はあっさり言った。朝日を背に、金の瞳を細めて。

「逃げてもいい。ただし、俺の翼より速く逃げてみせろ。——できるものならな」

「っ、性格が悪い！」

「よく言われる。ガレンに」

悔しいのに、張り詰めていたものが、その軽口で緩んでしまった。彼は岩橋のたもとの平らな岩に腰を下ろし、隣を顎で示す。逃げる脚も渡る度胸ももう残っていなかったから、私は一人分空けて座った。雲海が金色に

燃えて、朝が谷を満たしていく。

「一つ、訊いていい」

「いくらでも」

「どうして怒らないのか、まだ聞いてない。普通、怒るでしょう。百年待った相手が逃げたら」

彼はしばらく黙って、朝焼けを見ていた。

「——お前の意志を奪って手に入れても、意味がないからだ」
静かな声だった。

「翼を折って鳥籠に入れれば、逃げられはしないだろう。だが、それで手に入るのは俺を憎む生き物だ。俺が百年待ったのは、そんなものではない。……俺は、お前が自分の足でここに立ち、自分の心で俺を選ぶ日を待っている。百年待てた。この先も待てる」

風が、二人の間を抜けていった。朝日が彼の横顔を金に縁取って、その表情は静かで、少しだけ寂しそうで、それなのに揺るぎなかった。百年。口にすれば短い、私には想像も届かない時間。この人はその長さを、こんな顔で待っていたのか。

言葉が出なかった。この人は、私が昨夜あれほど恐れたことを、最初から全部分かっていた。選ばされるのと選ぶのは違うと、私が叫びたかったことを、私より先に、百年分の重さで知っていた。

「……掟のこと、聞いた。契ったら、人に戻れないって」

「ああ」

「怖い。正直に言う。あなたのことより、勝手に決められることが怖い。私、生贄になるのも勝手に決められた。親が死んだのも、厄介者になったのも、村を出ることも、全部、気づいたら決まっていた。人生で大事なこと

を、一度も自分で選ばせてもらえなかった」

言いながら、自分でも驚いていた。こんなこと、誰かに言ったのは初めてだった。村の誰も訊いてくれなかったし、訊かれても言わなかっただろう。なのにこの人の前だと、二十年分の澱が、朝焼けに溶かされるみたいに口について出てしまう。

「知っている」

彼の手が伸びて、私の右手を取った。振り払えたのに、振り払わなかった。長い指が、掌の三日月の痣をなぞる。昨夜と同じ場所。金の瞳が、痣の上で不思議な色に細められた。懐かしむような、痛むような、祈るような。

「……その痣、何か知ってるの」

「いずれ話す。今はまだ、俺の口から言えば、お前の選択を縛る」

「また、はぐらかす」

「そうだ。ずるい男なのでな、俺は」

彼は私の手を離すと、居住まいを正して、真っ直ぐに私を見た。朝日の中で、冗談の色が消える。

「リゼット。取引をしよう」

「取引？」

「俺に、お前を口説かせろ。契りを迫りはしない。誓ってもいい、お前が心から望まぬ限り、番の契りは決して結ばん。そもそも竜の律がそれを許さん。その代わり、俺はあらゆる手でお前を口説く。飯も庭も書庫も甘い言葉も、百年分、遠慮なく注ぐ」

「……それ、私に何の得があるの」

「衣食住と、緋熾草の庭と、あの書庫」

「うっ」

「それから——嫌になったら、また逃げればいい。何度でも。俺は何度でも追いかけて、捕まえて、口説き直すだけだ」

ずるい。本当にずるい男だ。怒りもせず、縛りもせず、逃げ道を残したまま、逃げる理由だけを一つずつ取り上げていく。私は雲海を睨んで、さんざん黙って、それから渋々、自分の負けを認めた。……いや、負けじゃない。保留。あくまで保留だ。

「……口説かれてあげる、とは言っていない。勝手に口説けばいいですよ。私は勝手に逃げる算段をするから」

「交渉成立だな」

「成立してない！」

笑いながら立ち上がった彼に、当然のように横抱きにされて、私の抗議

は朝焼けの空に虚しく響いた。城へ戻る翼の音は、来た時よりずっと軽やかで、悔しいことに、彼の腕の中は今朝もあたたかかった。

城に戻ると、玄関広間でミュカが仁王立ちしていた。目が真っ赤だった。

「リゼットのばかー!」

小さな体当たりを受け止めた私の腹に顔を埋めて、ミュカはわんわん泣いた。起きたら私が消えていて、谷中の竜を叩き起こして探し回ったらしい。ごめん、と撫でる私の手を、涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔が睨み上げる。

「逃げるなら！　せめてご飯食べてから逃げて！　行き倒れたらどうするの！」

「……そこなの、怒るところ」

「あとあたしも連れてって！ 外、見てみたいから！」

脇で竜王が声を上げて笑い、つられて廊下の竜たちまで笑い出して、玄関広間はすっかり朝の空気になった。笑いの輪の真ん中で、私はこっそり途方に暮れる。何なの、この谷。生贄を攫った恐ろしい竜の巣のはずでしょう。どうして逃げた私を、誰も責めないの。

その日の朝食も、私は竜王の膝の上だった。抗議は却下された。「逃亡の罰だ」と真顔で言うくせに、皿の上には私が昨日美味しいと言ったものばかり並んでいるのだから、この男の罰は甘すぎて話にならない。しかも食後には、崖下りで擦り剥いた私の掌に、大袈裟なほど丁寧に軟膏を塗った。薬師の目から見ても呆れるほど上等な軟膏だった。

こうして、竜王陛下と逃亡花嫁の、奇妙な同居生活が始まったのだった。

第二部 初めての夜

竜王の口説きは、翌朝から本格的に始まった。

まず、花だった。毎朝、目覚めると枕元に一輪。初日は夜色の薔薇、二日目は鈴の音の釣鐘草、三日目は淡く光る霧の花、四日目は蜜の香りの月下香。ミュカによれば、どれも谷の外れの危険な岩場にしか咲かないもので、つまりあの竜王が毎朝自分で摘みに飛んでいるらしい。「陛下、夜明け前からうきうき出かけてくの。百年待った古竜のすることじゃないよね」とミュカは呆れていた。

次に、空だった。夕暮れ、黒竜の背に乗せられて雲海の上を飛ぶ。最初は悲鳴を上げた私も、五日目には風を読んで体を傾けることを覚え、十日目には燃える雲の峰を指差して笑っていた。竜の背中はず温かい。鱗は硬い

のに、不思議と痛くない。降りる時、人の姿に戻った彼が必ず手を差し出すのが常で、その手を取ることに、私はいつの間にか躊躇わなくなっていた。

「口説かれてあげてる訳じゃないから。飛ぶのが楽しいだけだから」

「ああ、分かっている」

分かっていると言いながら、あの顔は全然分かっていない。嬉しさを隠す気もない金の瞳を見るたび、胸の奥が変にくすぐったくなった。

極めつけは、菓子だった。ある午後、厨房から焦げ臭い匂いがして覗きに行くと、粉まみれの竜王がいた。人間の花嫁には人間の菓子だと、書庫の料理書を頼りに焼き菓자에挑んだらしい。皿の上には、炭と見分けのつかない何かが並んでいた。

「竜の火加減は、人の菓子には向かな」

「……ちょっと貸して」

気づけば私は袖をまくっていた。薬草を煎る火加減なら誰にも負けない。二人で粉を計り直し、焼き上がった不格好な菓子を摘みながら、私は声を上げて笑った。笑ってから、気づいた。誰かと並んで何かを作るのも、こんなふうに笑うのも、生まれて初めてだった。

夜は夜で、書庫だった。薬草学の棚の前に長椅子が二つ運び込まれ、いつからか、寝る前のひとときを並んで本を読むのが習いになっていた。彼は古い竜語の詩集を、私は薬草図鑑を。時々、私が母から教わった薬草の話をする、彼は頁を閉じて、最後まで聞いた。相槌も急かしもせず、ただ聞くのだ。母の話を誰かにしたのは十年ぶり、話しながら少し泣いた夜も、彼は何も言わずに、私の頭に大きな掌を置いていた。

半月が過ぎる頃には、認めざるを得なくなっていた。夕暮れが近づくと

窓の外を探してしまう。翼の音に心臓が跳ねる。食卓の膝の上が、定位置になりつつある。髪に落とされる口づけを、数えるのをやめられない。……まずい。これは、かなり、まずい。

「ねえミュカ。私、変かな。最近、あの人の顔がまともに見られない」

「知ってた。リゼット、陛下を見ると、りんごみたいになるもん」

「聞かなかったことにして」

湯船に沈みながら、私は自分の心臓に問いただす。これは口説き落とされたのか、それとも、私が勝手に落ちたのか。どちらにしても癪だという結論しか出なかった。

その夜は、月が細かった。

湯浴みを終えて廊下に出ると、彼が壁に凭れて待っていた。湯上がり

私を見て、金の瞳がわずかに揺れる。

「少し、付き合え。見せたいものがある」

連れて行かれたのは、城の最上階——彼の寝所だった。入るのは初めてだ。広い部屋の壁一面が硝子で、細い月と星の海がそのまま降り込んでくる。凄いと呟いて硝子に駆け寄った私の背後で、静かに扉の閉まる音がした。

「リゼット」

振り向くと、思ったより近くに彼がいた。月明かりの逆光で、表情の読めない輪郭。ただ、伸びてきた指が私の濡れ髪をひと房掬って、そこに口づけた。

「——触れたい。お前が許すなら」

声は静かで、けれど、押し殺した熱がその底で燦っていた。命令でも、

懇願でもない。扉はすぐそこで、拒めば彼は退くのだろう。あの朝の岩橋で誓ったとおりに、この人は私の意志を待っている。百年待って、まだ待とうとしている。

だから、これは私の選択だ。

胸の奥で、半月分の「まづい」が音を立てて崩れた。怖い。心臓がうるさい。でも、離れたくない。毎朝の花も、夕暮れの空も、焦げた菓子も、頭に置かれた掌も、全部この人だった。二十年間、誰にも触れられなかった場所に、この人だけが当たり前みたいに入ってきた。この熱の続きが知りたいと、体の芯が正直に疼いている。

私は息を吸って、彼の黒衣の胸元を、指先でそっと掴んだ。

「……少しだけ、なら」

言い終わる前に、唇が塞がれた。

最初は触れるだけ。角度を変えて、もう一度。三度目に、熱い舌が唇を割って入ってきた。

ぴちゃ……くちゅ……♡

「ん……っ、ふ……♡ んん、う……♡」

口づけがこんなものだなんて、知らなかった。上顎をくすぐられ、怯える舌を搦め捕られ、じゅ、と吸われる。混ざった唾液を飲まされるたび、腰の奥がとろりと重くなる。息継ぎを許された一瞬、間近の金の瞳と目が合った。細い月を溶かし込んだような瞳孔が、わずかに縦に裂けて揺れている。ああ、竜の目だ。この人の中の竜が、私を欲しがっている。そう思った瞬間、怖さよりも先に、背筋を甘いものが走り抜けた。

「口づけだけで、そんな顔をするな。……手加減が、利かなくなる」

「し、してない、そんな顔……んむっ♡」

抗議は二度目の深い口づけに飲み込まれた。膝から力が抜けて、気づけば私は彼の腕に抱き上げられ、天蓋の大きな寝台に沈められていた。絹の敷布が背中中で鳴る。見上げた先で、彼が黒衣の襟元を寛げた。月明かりに浮かぶ、彫刻めいた鎖骨と胸板。目のやり場に困って視線を逸らすと、喉の奥で笑われた。

「……随分と、蕩けた顔だ」

「い、言わないで……っ」

「無理だな。百年待った男に、この眺めを黙って見ていると？」

夜着の紐が、しゅる、と解かれる。月明かりの下、素肌が晒されて、私は反射的に胸を隠した。その手首をやんわりと枕の上に縫い留めて、彼は喉の奥で低く笑う。

「隠すな。……ああ、綺麗だ。想像していたより、ずっと」

「そんなの、見え……ひゃんっ♡」

乳房を大きな掌がすくい上げ、やわやわと形を変える。

むにゅ……むにゅっ♡　くにっ♡

「あっ……ん、や……なにこれ……っ♡」

人の手が触れているだけなのに、触れられた場所から甘い痺れが広がっていく。先端が、じん、と芯を持つのが自分で分かった。彼の指がそこを掠め、くり、と転がす。

「んんっ♡　あ、そこ……変、へんに……っ♡」

「ここが好きか。なら、こちらは」

言うなり、熱く濡れたものが反対の乳首を包んだ。舌だ、と理解した瞬間、背中が勝手に浮いた。

ちゅう……♡　れろ、くりくり……ちゅぱっ♡

「ふああっ♡ あ、だめ、吸っちゃ……あん♡ ん、んう……っ♡」

吸われて、転がされて、甘噛みされて。右と左を交互に可愛がられるうちに、腰の奥の重さが、はつきりとした疼きに変わっていた。じん、じんと脈打つそれは、お腹の奥の、もっと深いところから滲んでくる。無意識に太腿を擦り合わせた私の仕草を、彼は見逃さなかった。

「……もう、切なくなっただか」

「ちが……っ、これは……」

「隠さずともよい。俺も、だ」

手首を取られ、彼の胸に導かれる。掌の下で、驚くほど速い鼓動が打っていた。いつも余裕たっぷりのこの人の心臓が、私と同じ速さで走っている。それだけのことが、どうしてこんなに胸に効くのだろう。

「百年待った。だが、今この時ほど、俺の理性が試されている夜はない」

囁きながら、大きな手が、内腿を撫でて上がってくる。膝の裏、腿の内側、際どい付け根の手前。焦らすようにゆっくりと辿られて、触れられてもない場所が、期待ではしたなく疼いた。早く、と思ってしまった自分に頬が燃える。夜着の裾をかき分け、脚の付け根に指先が触れた、それだけで。

くちゅ……♡

小さな水音が、はっきりと聞こえた。

「や……っ、うそ、私……」

「濡れている。……よく蕩けた、いやらしくて可愛い体だ」

割れ目に沿って、指がゆっくりと上下する。ぬる、ぬる、と滑るたびに、自分のそこがどれだけ潤んでいるか思い知らされる。恥ずかしくて死にそうなのに、腰が勝手に揺れてしまう。

くちゅ、にちゅ……ぬちゅっ♡ くちゅくちゅ♡

「あっ♡ あっ♡ やあ……音、たてないで……っ♡」

「無理を言うな。お前がこんなに溢れさせているのに」

割れ目の上端、包皮の上から敏感な芽を指の腹がそっと押し潰し、円を描く。目の前で星が散った。

くりくり……♡ にちゅ、くにくに……っ♡

「ひああんっ♡ そこ、だめ、だめえ……っ♡ あっ♡ あっ♡ ぐっ♡
なにか、きちゃう、から……っ♡」

「来ればいい。初めてなら尚更、ここでたっぷり蕩けておけ」

「むり、むりい……っ♡ こわれちゃ……ふああっ♡」

声が抑えられない。村の小屋なら壁の薄さを気にしただろうに、この空の上の寝所では、私の甘ったるい声はどこまでも響いて、それがまた羞恥

と快感を煽った。敷布を握り締めた指が白くなる。膝が勝手に震えて、開いて、もっとと強請るように腰が浮く。はしたない。はしたないのに、止まらない。気持ちいい♡ ……ああもう、認める。気持ちいいの、これ。

「感じているお前は——百年待った甲斐がある眺めだ」

耳元で囁く声は、いつもの余裕の底に、隠しきれない熱を孕んでいた。その声にすら感じて、膣口がきゅんと切なく戦慄くのが分かる。蜜口の縁を浅くくすぐっていた指が、溢れた愛液をまとして、つぶ、と沈む。

ぬぶ……くちゅっ♡

初めて知る圧迫感と、それを上回る甘い痺れに、私の思考は白く霞んでいった。

つぶり、と沈んだ指は、浅いところを優しく撫でるだけで、それ以上進

まなかった。

ぬちゅ……くちゅ……♡ くちゅくちゅっ♡

「あっ♡ ん、んんっ♡ ゆび、そんな、ゆっくり……っ♡」

「狭いな。……よくほぐさねば」

膣口のすぐ内側、ざらついた浅瀬を指の腹がくすぐるたび、お腹の奥から新しい蜜がとろとろ溢れてくるのが自分で分かった。恥ずかしいのに、腰が揺れる。もっと奥、と疼く場所には決して触れてくれない、意地悪なくらい丁寧な指。

「や……っ、なんで、そんな焦らす……っ♡」

「焦れているのか？ なら——こちらで詫びよう」

言うなり、彼の体が下へ滑った。膝裏を掬われ、大きく脚を開かされる。

月明かりに全部晒されている、と気づいた時には、濡れそぼった割れ目に

熱い吐息がかかっていた。

「ま、まって、そこ、顔ちかい……っ、汚いから……っ」

「汚くなどない。……綺麗な色だ。それに」

金の瞳が、脚の間から私を見上げて、艶に細められる。

「百年待った男から、花嫁の蜜を味わう権利を取り上げるな」
ぬるり、と。

熱くて柔らかいものが、割れ目を下から上へ舐め上げた。

「ひあああんっ♡♡」

指とは全然違った。溶ける。そこから溶ける。舌は淫唇を一枚ずつ丁寧に食み、溢れる愛液をじゅるりと啜り、それから包皮ごとクリトリスを咥え込んだ。

ちゅうっ♡ れろれろ……ぴちや、ちゅぱっ♡ じゅるっ♡

「あっ♡ あっ♡ だめ、それだめ、吸っちゃ……んうっ♡ へんに、なる、なっちゃう……っ♡」

髪を掴んでいいのか押し退けるべきなのか分からないまま、私の指は彼の黒髪に絡んで、結局引き寄せていた。腰が勝手に跳ねる。それを大きな掌が押さえ込んで、逃げ場のないまま、敏感な芽を舌先がくりくりと転がし続ける。

ぴちゃぴちゃ♡ くちゅ♡ ちゅううっ♡ れろっ♡ じゅぶっ♡

「ああっ♡ やあん♡ も、だめ、ほんとに……っ♡ なにか、くる、きちゃう……！ あ、あ、あ——っ♡」

目の裏が白く灼けた。

腰の奥で膨らみ続けていた熱が、一気に弾ける。つま先がぴんと張り、背中が弓なりに反って、私は生まれて初めての絶頂に、声にならない声を

上げて震えた。

「んう~~~~っ♡♡ ……っ、あ……♡ あ……♡ はあ……♡」

どく、どく、と全身で脈が鳴っている。指先までピクピクと甘い痙攣が走って、力が入らない。力の抜けた脚の内側に、彼が宥めるような口づけを落とすのをぼんやり感じた。

「……上手にイけたな。初めてとは思えん素直さだ」

「ばか……っ、はあ……♡ い、言わないでっ、ば……」

睨んだつもりが、涙で滲んで、多分全然睨めていなかった。達したばかりのそこは、まだヒクヒクと戦慄いていて、彼の視線を感じるだけでまた新しい蜜を零してしまう。体の芯が溶けたみたいに熱い。指一本動かすのも億劫なのに、物足りない、と疼く場所がある。お腹の奥。誰にも触れられたことのない、いちばん深いところ。自分の体がこんなに欲張りだなん

て、今夜まで知らなかった。彼が体を起こす。寬げただけだった黒衣が、今度こそ落とされて、月明かりに逞しい裸身が浮かんだ。引き締まった腰の下――臍を打たんばかりに反り返ったそれから、私は目を逸らせなかった。大きい。指なんて比べ物にならない。硬く張り詰めた幹に太い血管が浮いて、先端の亀頭が濡れて光っている。